Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

この原稿を起こしている段階では閉幕まであと10日ほど残しているのだが、現時点で既に今季の英国におけるリーディングトレーナーの座を確定的にしているリチャード・ハノン・ジュニアが、今回のこのコラムの主役である。ハノン・ジュニアが調教師のライセンスを取得し自らの厩舎を立ち上げたのは今年1月1日で、つまりは開業1年目にしてリーディング獲得という偉業が達成されたのだ。

ただし、である。彼が運営しているのは、父リチャード・ハノン・シニア調教師から受け継いだ、直近の4シーズンで3度リーディングの座に就いていた厩舎で、しかもジュニアは2002年から12年の長きにわたって父のアシスタントとして運営に携わっていたから、「開業1年目」と称するにはいささか語弊があることは確かだ。そして、一線を退いたとはいえ父は壮健で、後方支援部隊として目を光らせていた中ではあったものの、ジュニアにとっては傘にも盾にもなっていた父に代わって陣頭指揮をとった最初の年に、これだけの成功を収めた手腕には素直に敬意を表するべきと筆者は考える。

1975年11月21日生まれだから、まもなく39歳の誕生日を迎えるのがハノン・ジュニアだ。父の右腕となる以前、ハノン・ジュニアが修行の場に選んだのは、欧州で父のライバルとなっていた陣営ではなく、北半球の競馬大国である米国でもなく、南半球のオーストラリアで、ここで複数の厩舎を渡り歩いて研鑽を積んだ後に、父の厩舎に加入した。

調教師の本分は何かと問われれば、管理馬をいかにして仕上げ、いかにして競馬で勝たせるかにあることは言うまでもないが、厩舎経営を成功させる上で必要なもう1つの大切な側面が、いかにして上質のクライアントを獲得し、いかにして上質の素材を傘下に収めるかにある。いわば「営業力」と言うべきそうした側面で、類い稀なき才能を発揮しているのが、アシスタント時代を含めたハノン・ジュニアであった。カタールのジョアン殿下やファハド殿下、ドバイのハムダン殿下やサイード・マナナ氏らはいずれも、アシスタント時代のハノン・ジュニアが獲得したクライアントで、ここ数年父の厩舎にあって主力として動いていたのはこうした馬主たちの所有馬であった。オフィスを改装して広くて快適な接客スペースを設けたり、調教を見学することが出来るバルコニーを備えたりしたのもハノン・ジュニアで、父が運営した厩舎が直近の4シーズンで3度リーディングを獲得できたのも、実は半ばはジュニアの功績であったと言われている。

それだけではなくハノン・ジュニアは、欧州の厩舎では珍しい洗い場を設けて、そこに馬用のシャワーを設置したり、体重計を置いて馬体重を測定したりなど、管理馬の仕上げという面でも新機軸を打ち出し、ジュニア色を前面に押し出していったのだった。

厩舎の主戦騎手リチャード・ヒューズは、ハノン・ジュニアの妹リジーの夫だ。すなわちハノン家には今、父、子、義弟と、3人のリチャードがいるわけで、そのままでは紛らわしいので競馬サークルでは、父が「シニア」で子が「ジュニア」、義弟は名字の方をひねって「ヒュージー」と呼び分けている。

1月3日にウォルヴァーハンプトンで行なわれたメイドンをアンスクリプテッド（牡3）が制して管理馬による初勝利を挙げ、4月17日にはトゥアモア（牡3）でG3クレイヴンSを制して重賞初制覇。そして5月3日にはサイード・マナナ氏所有のナイトオヴサンダー（牡3）でG1英国二千ギニーを制してG1初制覇を飾るなど、ロケットスタートを見せたのが、新生リチャード・ハノン・ジュニア厩舎だった。

その後も、ジョアン殿下のオリンピックグローリー（牡4）でG1ロッキンジSやG1ラフォレ賞、同じくジョアン殿下のトロナード（牡4）でG1クイーンアンSを、テイギーウィギー（牝2）でG1ミドルパークSを制するなど、1年を通じて活躍を続け、リーディングの座を獲得したハノン・ジュニアが、今後の英国競馬界を背負って一人であることは、間違いなさそうである。